

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520245

研究課題名（和文）

クィア・リーディング実践と方法—ヘミングウェイとキャザーの人種、民族、地域性

研究課題名（英文） Queer Reading Practice and Its Methodology: Race, Ethnicity, Locality in Works of Hemingway and Cather

研究代表者

松下千雅子（MATSUSHITA CHIKAKO）

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：90273200

研究成果の概要（和文）：

1990年代にはカミング・アウトしたレズビアン作家やゲイ作家によって書かれた作品のアンソロジーが多く編纂された。それと平行してキャンノンに属する過去の作家たちについても、これまで気づかれなかった同性愛的傾向が文学批評においてクローズアップされるようになった。そして、これらの批評の多くが「クィア・リーディング」と呼ばれた。この手法では、歴史上のゲイ/レズビアンや、これまでストレートだと思われていた人たちの中に隠されたホモエロティックな欲望を可視化することに成功したが、しかし、クィア理論において「クィア」という語に込められた意味を十分に満たしているとは言えない。テキストにある同性愛のコノテーションを見つけ出す読み方は、一見すると解放主義的かもしれない。しかし、実際にはクローゼットの中に隠れている同性愛者を外に引っ張りだしているにすぎず、見つけられた同性愛者は、結局は正常な異性愛/異常な同性愛という不平等な二項対立の図式に回収されていくことになる。そもそも、「クィア」という言葉が批評理論に導入された背景には、異性愛/同性愛の二元論を脱構築するという明確な意図があった。その意図に忠実であろうとするならば、隠れた同性愛を明るみに出すような「アウトイング（外に出すこと）」の読みでは、「クィア」という批評概念に基づく読解とは言えないはずである。それゆえ、「アウトイング」に頼らないクィア・リーディングの方法論を確立することは急務であった。

本研究は、その課題を遂行するために行ったものである。アーネスト・ヘミングウェイとウィラ・キャザーの文学テキストについて、「アウトイング」が行われる際、いかなる力関係が介在するのかわ、物語論や精神分析を用いて分析した。もし、文学の読みにおいて、テキスト内の登場人物の性的な欲望や行動が描写され、そのことによりホモセクシュアルであると決定されうるとしたら、それはどのようにして可能になるのか。そうした描写は誰に帰属するのか、誰がその描写の意味を解釈するのか、そしてその人物のセクシュアリティを判断する決定権を持つのは誰なのか。本研究では、これらのことを明らかにし、同性愛者がクローゼットの中にいるのか外にいるのかという議論ではなく、クローゼットそのものがどのようにして構築されていくかを明らかにした。それゆえ、本研究では、テキストに込められた性的な意味を、言説の外に存在するものの反映ではなく、あくまでも言説的な経験、すなわち、作者、語り手、読者の間で取り交わされる言語行為として捉えることが可能になった。

研究成果の概要（英文）：

In the 1990s, many anthologies were compiled from works of lesbian and gay authors who had "come out." In the meantime, the hitherto unnoticed homosexuality of canonical authors also came to be a hot topic in literary criticism, being called queer reading. However, this trend did not gratify what the queer theorists actually meant by using the word "queer," though practically it could visualize the existence of gays and lesbians in history as well as the possibility of homoerotic desire hidden in the people who were assumed to be straight. To discover a text's hidden homosexual connotations might seem to be a liberating way of reading. But in reality, all it could do

was to drag the hiding homosexuals out of the closet, letting them be subsumed under the unequal binary opposition between normal heterosexuality and abnormal homosexuality. When the vocabulary of "queer" was added to the lexicon of critical theory, there was an unmistakable intention to deconstruct just that opposition. Therefore, "outing," that is, text-reading to expose hidden homosexuality, was not really faithful to the critical concept of the queer. So, it was urgently necessary for the literary criticism to establish a way of queer reading that did not rely on "outing."

This project has been started for this purpose. Through readings of several texts written by Ernest Hemingway and Willa Cather, analyzes have been done on the hermeneutic dynamics at work in the process of "outing" by applying narratology and psychoanalysis. If the description of a certain sexual desire or activity can help determine the sexual identity of a fictional character, how does it do so? By clarifying to whom such a description belongs, who interprets the meaning of that description, and most importantly, who has the power to judge that character's sexuality, the queer reading presented in this project focuses on the process of how the closet itself comes to appear rather than discussing whether homosexuals are "in" or "out" of the closet. In this project, therefore, any sexual implication in the written texts is understood as a discursive experience that could be shared between the author, the narrator, and the reader, rather than the reflection of a thing that would be assumed to exist outside discourse.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米文学

キーワード：アメリカ文学・クィア理論・ヘミングウェイ・キャザー

1. 研究開始当初の背景

「クィア」という語と「理論」という語を繋げた「クィア理論」という批評分野が確立し、「クィア」という言葉が批評用語として広く使用されるようになったのは、de Lauretisの仕事によるところが大きい。彼女が“Queer Theory”の中で明らかにしたのは、ジェンダー、人種、階級などの差異を内部に含んでいるにも関わらず、レズビアンとゲイをひとつのグループであると見なすことが、グループ内部に生じる差異を排除し隠蔽する構図である。その上でデ・ラウレティスが明確にしていることは、「ジェンダーの差異はもちろん、人種の差異がクィア理論のきわめて重大な関心領域」であるという点である。

英米文学研究は、早くからレズビアンとゲイの主張を取り入れ、カミング・アウトしたレズビアン作家やゲイ作家によって書かれたテキストのアンソロジーの編纂を通して、

ホモセクシュアルというサブカルチャーを、文学におけるサブジャンルとして確立していった。同時にキャンノンに属する過去の作家たちの性的な側面を入念に調べ上げ、そのホモセクシュアルな傾向をあぶりだすことによって、キャンノンとサブジャンルの境界を曖昧にすることにも成功してきた。さらに、ホモセクシュアルを普遍化する方向でクィアが理論化されるやいなや、これまでヘテロセクシュアルであると考えられていた作家あるいはテキスト内の人物に関しても、クィア・リーディングという名のもとに、ホモセクシュアルな欲望が次々と暴かれていくことになった。このような方向で進んでいく文学批評における読みの実践において、クィア理論は、隠されたホモセクシュアルな欲望を明るみにすることに一役買わされてきたとあってよい。クィア理論の重要な概念として、隠されたホモセクシュアリティを示す

「クローゼット」があるが、これまでの文学批評の実践の多くは、ゲイ／レズビアンをクローゼットから引き出す試みであったといえるからだ。

クローゼットとは、ホモセクシュアルであることがわからないようにゲイ／レズビアンが隠れている場所を表す隠喩である。もしうまく隠れているなら、その人はクローゼットの中にいる、すなわち「イン」であるとされる。一方、もし周りの人たちがその人のホモセクシュアリティに気づくか、あるいは、その人自らがホモセクシュアルであることを公表したなら、その人はクローゼットの外にいる、すなわち「アウト」であるということになる。テキストに描かれた特定の欲望を指して「ホモセクシュアル」であるとするような読み、つまりテキストに隠されているインである一ホモセクシュアルな欲望をアウトするような読みは、フーコーが批判する「セクシュアリティの科学」的な読みである。なぜならそれは、見つけるべき対象のホモセクシュアリティはつねにクローゼットの中にあるか外にいるかのどちらかであるとするイン／アウトのモデルを生み出すような、セクシュアリティを知の対象とする理論的枠組に基づいているからである。

にもかかわらず、多くの場合はゲイ／レズビアン批評と称して—しかし、ときにはクィア批評と称して—これまで多くの作家や物語の登場人物たちがアウトイングされてきたことも事実である。代表者は、こうした批評の現状を踏まえ、フーコーの知見に基づいて、イン／アウトのモデルによるセクシュアリティの認識構造が、文学テキストの解釈にどのように持ち込まれてきたかを指摘し、セクシュアリティの存在論に基づかないクィア・リーディングの方法を模索してきた。代表者が目指してきたのは、文学研究における物語に関する理論とセクシュアリティ研究に基盤をおいたクィア理論とを組み合わせた読みの可能性として、「クィア・リーディング」の方法論を提示することであった。それは「アウトイング」によって可視化されるクローゼットという構造の、物語における形成過程を、認識論的に探るという手法をとるものであり、物語で読み取ることができるセクシュアリティの存在よりも、その表象をめぐる語り手、作者性、批評の絡み合いを研究の主要なテーマとするものである。

しかし代表者のこれまでの研究が、ジェイムズ、キャザー、ヘミングウェイという白人中産階級に属する作家を対象に、白人登場人物の欲望、身体、アイデンティティだけに焦点を当ててきたやり方は、クィア・リーディングの総括的な方法論を確立するという、より大きな目的を果たすためには不十分であったろう。当然のことながらホモセクシュアルな

欲望は中産階級の白人の身体だけに現れるわけではない。むしろ規範から逸脱した欲望は、白人中産階級中心社会において規範的ではないとされる有色人種や階級の低い人物の身体に極めて頻繁に投影される。それゆえ今後の研究においては、人種、民族、階級、国家、地域性などの諸要素を、クローゼット形成に関連する重要な問題として視野に入れ、より多くの文学テキストを扱うような包括的なクィア・リーディングの実践が必要とされる。本研究は、この研究プロジェクトの第一段階として、特にキャザーとヘミングウェイのテキストにおける人種、民族、地域性に焦点をあてるものであり、セクシュアリティとの関連においてそれらが欧米白人中産階級の視点からどのように解釈され、クローゼットの形成と物語構造に関わっているのかを明らかにするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、代表者がこれまで行ってきたクィア・リーディングの実践と方法論に関する研究を深化させ、セクシュアリティだけでなく、人種、民族、地域性を視野に入れて、より総括的なクィア・リーディングの方法論を確立するためのものである。文学テキストに隠蔽された作者や登場人物のホモセクシュアルな欲望を明るみに出すことに専心してきた従来の解釈上のイン／アウト・モデルに異議申し立てを行い、イン／アウト・モデルがむしろクローゼット形成の一端を担っていることを明らかにすることにより、解釈する側のアウトする欲望を逆照射するようなテキストの読みを、クィア・リーディングにおけるひとつの実践として示す。さらに、文学テキストに表象される人種、民族、階級、国家、地域性などの諸要素を、クローゼットの形成に関連し、クィア・リーディングが射程に入れるべき重要な問題として捉え直し、より大きな批評的スケールでクィア・リーディングの可能性を模索する。研究の全体構想では、研究対象として20世紀初頭のアメリカ文学のテキストを念頭においているが、本研究では、特にヘミングウェイとキャザーのテキストに表象される人種、民族、地域性を、セクシュアリティに関連してどのように読み解いていくべきかについて考察する。

## 3. 研究の方法

具体的には、Hemingway と Cather のテキストに描かれるアフリカ、カリブ海、アメリカ中西部などの地域、アメリカ原住民、アフリカ系アメリカ人、アフリカ人、キューバ人などの人種、民族に注目し、それらが、語る視点やプロット構成などの物語の諸要素とどのように関連しながらセクシュアル・アイデンティティとクローゼットの形成に寄与

しているかを明らかにする。さらに、伝記研究によって「レズビアン」であるとしてクローゼットから「アウト」されたキャザーと、マッコで異性愛のアイコンとして批評家が温存してきた——つまりクローゼットにずっと「イン」されてきた——ヘミングウェイとを対置させることにより、クローゼットと（イン／アウトする）批評との関係を明らかにする。加えて、世界中を旅行したヘミングウェイと、アメリカ中西部を舞台に小説を書き続けたキャザーの地域性を、それぞれの人種、民族、セクシュアリティの描き方と関連させて読み解く。

本研究が対象とする主要なテキストは、*A Lost Lady*, *The Professor's House*, *Sapphira and the Slave Girl*, *The Old Man and the Sea*, *Islands in the Stream*, “The Snows of Kilimanjaro”, “The Short Happy Life of Francis Macomber”, “The Indian Camp”などである。先行研究に O'Brien, *Willa Cather: The Emerging Voice*, Sedgwick, *Tendencies*, Butler, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of “Sex”*, Moddelmog, *Deading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*, Comley and Scholes, *Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway Text* などがあるので、適宜これらに批判を加えながら研究を進める。本研究でもまた白人中産階級の作家によるテキストを研究対象とするが、それは本研究が人種、民族、地域性を本質主義的に探求するものではなく、むしろそれらがいかにして欧米白人中産階級を中心に編成され解釈されているかを見ていくことを意図しているからである。物語で中心的な位置を占める白人中産階級の視点が、その他の人種、民族、地域をどのようにセクシュアリティに関連づけているのかをテキスト分析を行うことによって解き明かしていく。

#### 4. 研究成果

本研究の最大の成果は、これまでのクィア・リーディングに対する批判として「ポスト・アウトイング批評」を打ち立てたことである。それは、セクシュアリティの言説が生み出されるとき、そこに、いかなる力関係が介在するのかを読み解くことである。言い換えれば、もしテキストにホモセクシュアルな欲望が読みとれるのだとしたら、それはどのようにして読みとれるのか、誰が、どのレベルで、そのような欲望をアウトするのか、といったことがらを、誰が同性愛者かということよりも、重視するような読みである。テキストのなかで、ホモセクシュアルな欲望はどのように立ち現れるのか。それはどのような身体をとまうのか。同性愛というアイデンティティは、どのような性実践と対象選択によって成り立っているのか。これらは文学作品を取

り巻くある種の政治性を示しているが、そのことを文学的なレトリックのなかに読みとることが、ポスト・アウトイング批評の課題となる。それゆえ、ポスト・アウトイング批評とは、物語の本当の意味や、作者の意図、登場人物のアイデンティティなどを解き明かすような読み方からは遠く離れ、反対に、それらがどのように表現されるかを追求するものであり、そこにはある意味、修辞学への回帰ともいえるような側面が見いだされる。

本研究では、2009年に『クィア物語論——近代アメリカ小説のクローゼット分析』（人文書院）を出版し、クィア・リーディングの新しい可能性を理論面において示した後、さらなる推考を重ね、2010年の論文“*What Could Be So Queer?: Psychoanalyzing Narrative Pleasure*” (*The Technology of Pleasure*, Eds. Chikako Matsushita, Edward Haig, and Yasushi Sugimura, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, 2010, 38-42)において、その理論を深化させた。そして最終年度では、2011年の学会発表「セクシュアリティと物語の快楽」日本英文学会中部支部第63回大会シンポジウム「語りの＜新しい＞可能性」、2012年の論文「ポスト・アウトイング批評—ヘミングウェイ「世の光」を例に」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』、2012年、169-177頁)において、「ポスト・アウトイング批評」という新しいジャンルを提示することができた。

このように確立してきた方法論を、実践面では、とりわけヘミングウェイ研究において国際的な成果を得ることができた。2010年にスイスで開催されたヘミングウェイに関する国際学会では、研究発表“*The Elephant in the Garden: The Hunting Story and ‘Tribal Things’ in The Garden of Eden*” (*Hemingway's Extreme Geographies*, 14th Biennial Hemingway Society Conference, 2010)を行った。このとき司会をしていた Miriam B. Mandel 氏から、研究書出版プロジェクトに共著者として招待され、2011年に *Hemingway and Africa* (Ed. Miriam B. Mandel [New York: Camden House, 2011], Chapter 6 を執筆)を出版した。これらは、ヘミングウェイのアフリカン・テキストに対してクィア・リーディングを行うとき、セクシュアリティ表象において「アフリカ」が象徴しているものと、アフリカという土地やアフリカに住む人々が、どのように関連づけられるのかを読み解いたものである。

さらに、北アメリカを背景とするテキストのうち、短編“*The Battler*”と“*The Last Good Country*”に関して、アウトイング批評

とクローゼット批評の両方の問題点を指摘した論文「スキャンダルはいつもスキャンダラス?—「ボクサー」と「最後の良き故郷」の近親姦クローゼット」(『ヘミングウェイ研究』11 [2011]: 37-47)を発表した。

本研究の功績は、クィア・リーディングの対象として、セクシュアリティそれ自体ではなく、クローゼットの形成過程に焦点を当てたことである。その際、セクシュアリティの言説のみならず人種、民族、地域性を、クローゼット形成の一端を担っているものとして捉え直した。しかし、これらの諸要素を、言説以前に存在する「もの」として捉えるような本質主義に基づく読みから距離を置き、それらをテキストにおいてクローゼットを形成する言語的な現象として認識論的に読み解いていく、そのメタ批評的な姿勢こそが、本研究から得た最大の成果であるといえるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 松下千雅子. 「スキャンダルはいつもスキャンダラス?—「ボクサー」と「最後の良き故郷」の近親姦クローゼット」. 『ヘミングウェイ研究』11 (2011): 37-47. 査読有.

[学会発表] (計3件)

① 松下千雅子 「セクシュアリティと物語の快楽」日本英文学会中部支部第63回大会シンポジウム「語りの<新しい>可能性」2011年10月30日(名古屋大学). Matsushita, Chikako.

② “The Elephant in the Garden: The Hunting Story and ‘Tribal Things’ in *The Garden of Eden*. Hemingway’s Extreme Geographies, 14th Biennial Hemingway Society Conference. June 27, 2010. University of Lausanne, Switzerland.

③ Matsushita, Chikako. “What Could Be So Queer?: Psychoanalyzing Narrative Pleasure.” Technology of Pleasure International Conference. November 21, 2009. Nagoya University.

[図書] (計4件)

- ① 松下千雅子 「ポスト・アウティング批評—ヘミングウェイ「世の光」を例に」(科学研究費補助金研究成果報告書『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学—』2012年、169-177頁)。
- ② Tanimoto, Chikako. “An Elephant in

the Garden: Hemingway’s Africa in *The Garden of Eden* Manuscript.” *Hemingway and Africa*. Ed. Miriam B. Mandel. New York: Camden House, 2011. 199-211.

③ Matsushita, Chikako. “What Could Be So Queer?: Psychoanalyzing Narrative Pleasure.” *The Technology of Pleasure*. Eds. Chikako Matsushita, Edward Haig, and Yasushi Sugimura. Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, 2010. 38-42.

④ 松下千雅子 『クィア物語論—近代アメリカ小説のクローゼット分析』(人文書院, 2009年)。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

松下千雅子 (MATSUSHITA CHIKAKO)  
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・  
准教授  
研究者番号：90273200

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし